

研究主題 資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む 授業の在り方に関する研究（1年次）

－「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を通して－

【2年研究】 総論

【研究担当者】 新沼 健

【この研究に対する問い合わせ先】

TEL 0198-27-2735 Fax 0198-27-3562

E-Mail kyouka-r@center.iwate-ed.jp

1 はじめに

平成 28 年 12 月に、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（以下「答申」という）」（2016）が出されました。

その中で、これからの社会を創り出していく子供たちに求められる資質・能力とは何かを、学習する子供の視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて『何ができるようになるのか』という観点から、育成を目指す資質・能力を以下の三つの柱（以下「三つの柱」という）で整理しています。

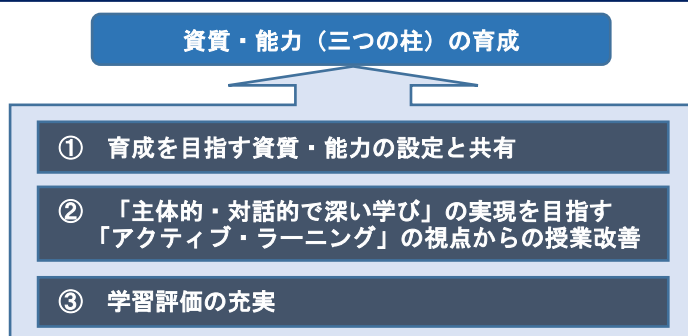
- ①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- ②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養）」

これら「三つの柱」をバランスよく育むためには、『何を学ぶのか』という指導内容等の見直しとともに、それらを『どのように学ぶのか』という子供たちの具体的な学びの姿について「主体的・対話的で深い学び」の実現の視点からの見直しが欠かせないものとしています。

こうした流れを受け、本研究では、「三つの柱」を総合的に育むことを目指し、「主体的・対話的で深い学び」の実現の視点からの授業改善に取り組んできました。また、授業をより充実したものにしていくために、「生徒たちにどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉える学習評価についても取り組み、学習評価の内容を学習・指導方法の改善につなげていくカリキュラム・マネジメントの考え方についても検討していきたいと考えています。

2 「三つの柱」を総合的に育むための取組

資質・能力の「三つの柱」を総合的に育むために、①育成を目指す資質・能力の設定と共有、②主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、③学習評価の充実に取り組みます。28年度は、そのための理論の構築、29年度は理論に基づいた実践を通しての検証を行います。



① 育成を目指す資質・能力の設定と共有

今後、各学校では、答申(2016)で示された「学校教育を通じて育てたい姿」や資質・能力の「三つの柱」を踏まえつつ、自校の教育目標や育成を目指す資質・能力を明確にし、子供たちの資質・能力の育成の実現に向けて、全ての教職員で取り組んでいくことが求められています。

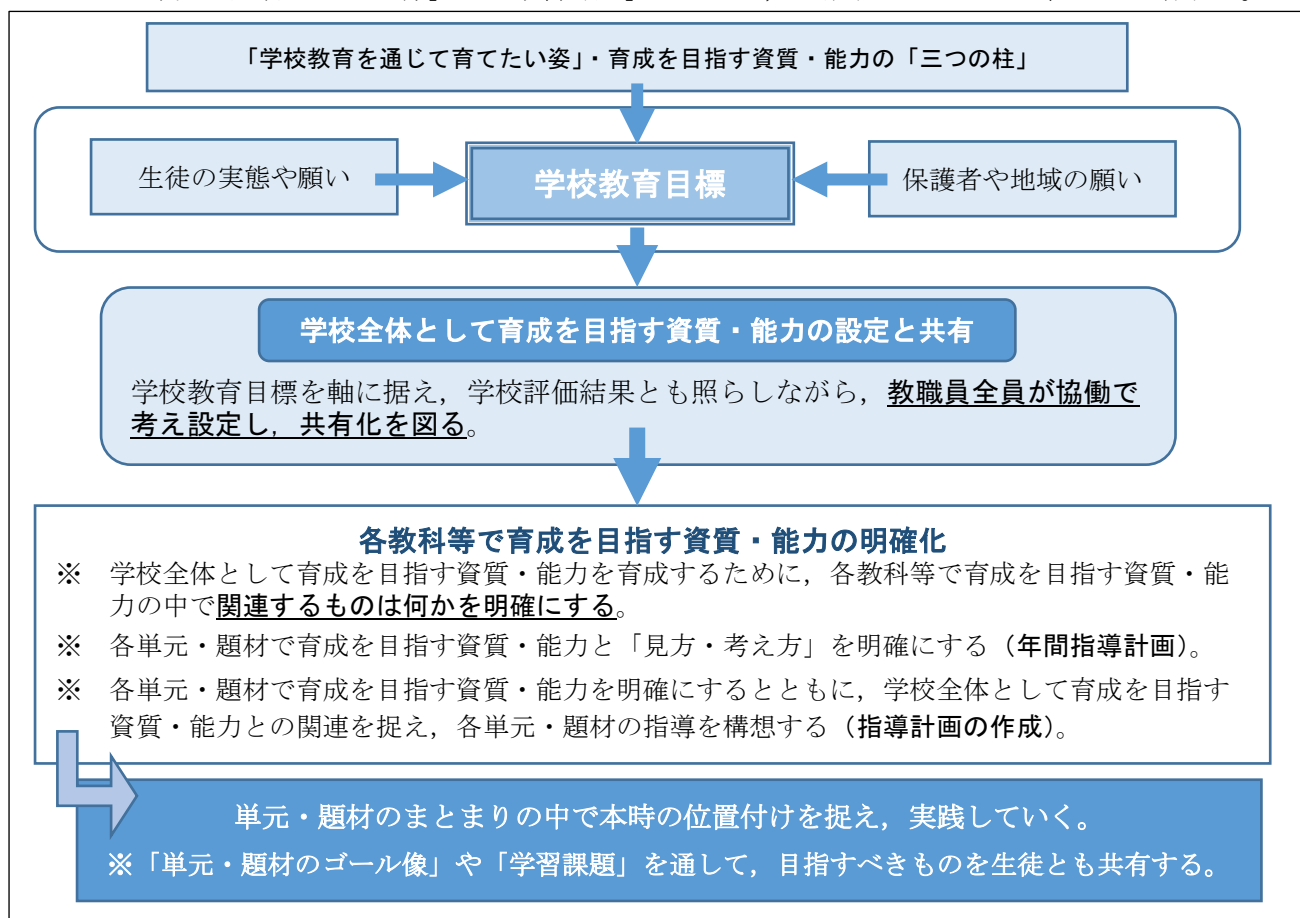
そこで、学校全体で育成を目指す資質・能力を明確にし、それを日々の授業の中で実現していくためには、次のア、イに教職員全員が協働で取り組んでいくことが大切であると考えました。

ア 学校全体として育成を目指す資質・能力の設定と共有

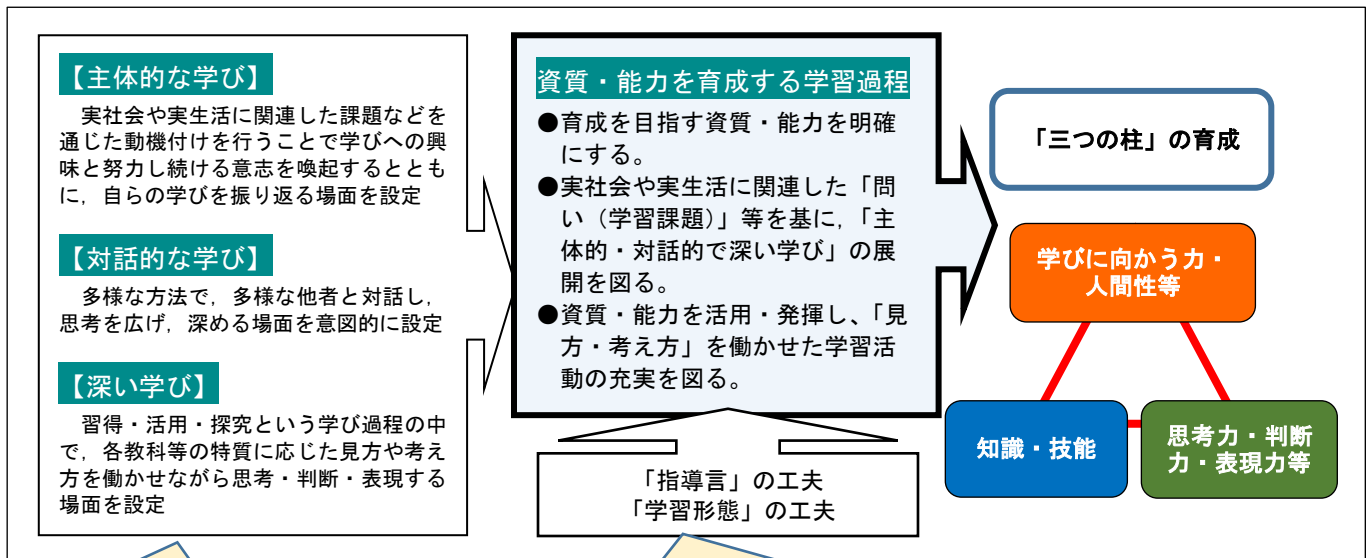
- ・「学校教育を通じて育てたい姿」や資質・能力の「三つの柱」を踏まえ、生徒の実態や生徒の願いや保護者や地域・社会の願いに基づき設定されている学校教育目標等を軸に据え、学校評価結果とも照らしながら、学校全体として育成を目指す資質・能力を設定する。
- ・教職員全員が協働で考え設定することを通し、共有化を図る。

イ 各教科等で育成を目指す資質・能力との関連付けと指導計画の作成

- ・学校全体として育成を目指す資質・能力を育成するために、各教科等で育成を目指す資質・能力の中で関連するものは何かを明確にし、年間指導計画等に位置付ける。
- ・各単元・題材で育成を目指す資質・能力を明確にするとともに、学校全体として育成を目指す資質・能力との関連を捉え、各単元・題材の指導を構想する。
- ・「単元・題材のゴール像」や「学習課題」を通して、目指すべきものを生徒とも共有する。



② 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善



「主体的・対話的で深い学び」は、1 単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、**各単元・題材**のまとまりの中で、例えば主体的に学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、**生徒が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか**、といった視点で各単元・題材における学習過程及び学習活動等を構想します。

各教科等の特性に応じて重視すべき**学習過程**については、「答申」(2016)において各教科等で示された「**学習過程のイメージ**」を基に捉えていくこととします。その際、**それぞれの過程において活用・発揮される資質・能力を捉えるとともに、資質・能力を活用・発揮させる学習活動の具体（「見方・考え方」を働かせた学習活動）**を構想し、子供たちが習得した概念や思考力等を手段として活用・発揮させながら学習に取り組み、その中で**資質・能力の活用と育成が繰り返させるような学習過程**としていきます。

平成 27 年度に「中学校社会科及び高等学校地理歴史・公民科における『アクティブ・ラーニング型授業』の進め方に関する研究」で取り組んだ「**指導言の工夫**」,「**学習形態・手法の工夫**」は、「主体的・対話的で深い学び」に導く上で欠かせない要素とし、授業づくりの基盤としていきます。

■ 「見方・考え方」を働かせた学習活動の構想について

「見方・考え方」を軸とした授業改善につなげるためには、各単元・題材における「見方・考え方」を明確にし、授業の中で生徒の学びが深まるような「見方・考え方」を働かせた学習活動を構想していく必要があると考えます。

本研究では、答申(2016)で示された各教科等の「見方・考え方」の文章構造に照らし、各単元・題材において育成を目指す資質・能力と学習内容を関連させながら、各単元・題材における「見方・考え方」を明確にしていきます。以下【表】に中学校国語科における「言語による見方・考え方」の文章構造を例とし、各単元・題材における「見方・考え方」を明確にするための考え方を示します。

各単元・題材における「見方・考え方」を明確にすることで、各単元・題材の目標がより明確になったり、指導の手立てとして何が必要か見えてきたりするなど、指導の構想が深まるとともに、生徒が「見方・考え方」を働かせ学習を深めていくことができるような各単元・題材における問い(学習課題や発問)を構想することにもつながっていくと考えます。

【表】各単元・題材における「見方・考え方」を明確にするための考え方(中学校国語科の例)

| 中学校国語科「言語による見方・考え方」 | 単元における「見方・考え方」の明確化 |
|-----------------------|-------------------------------------|
| 自分の思いや考えを深めるため、 | → 本単元での「目的」は何か |
| 対象と言葉、言葉と言葉の関係を、 | → 本単元で捉える「対象と言葉、言葉と言葉の関係」は何か |
| 言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、 | → 本単元では「何に注目」して捉えるのか |
| その関係性を問い直して意味付けること。 | → 本単元での「関係性を問い直して意味付ける」とは、どうすることなのか |

③ 学習評価の充実

ア 資質・能力を見取る学習評価

資質・能力を適切に見取る学習評価

■評価の観点と評価規準
資質・能力の「三つの柱」を踏まえる

■評価場面・評価方法
評価場面の計画
適切に見取る方法の工夫

各単元・題材の指導計画の中に課題解決的な言語活動を位置付け、パフォーマンス評価等を行います。

これは、単位時間毎に必ず行うという考えではなく、単元・題材の指導計画に適切な場面と方法を位置付けて行うというものです。

パフォーマンス評価で生徒の学びの成果を評価する際には、「おおむね満足できる」状況（B）と「十分満足できる」状況（A）に基づいて、明確に判断できるようにしていきます。

<パフォーマンス評価例>

理科：知識・技能の観点における、実験操作やデータ記録
思考・判断・表現の観点における、実験結果の考察

■評価の観点

目標に準拠した評価の実質化、教科・校種を超えた共通理解に基づく組織的な取り組みを促す観点から、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点とします。

■評価規準

各教科等ワーキンググループにおける「審議の取りまとめ」に示された「評価の観点のイメージ」に基づいて設定しました。

また、本研究では、評価規準として示した「おおむね満足できる」状況（B）と判断されるもののうち、児童生徒の学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっていると判断されるものを「十分満足できる」状況（A）とし、【Aの視点（例）】として示すこととし、学習指導案に位置付けました。

※具体的事例については、各教科研究報告書等を参照ください。

<Aの視点（例）設定の留意点>

・十分満足できる状況は、質的な高まりや深まりから判断することにより「見方・考え方」と関連させて捉える。

例) 中学校社会科【思考・判断・表現】

B：米国において農業、工業ともに世界有数の生産が可能な理由について考察し、説明している。

A：農業、工業ともに世界有数の生産が可能な理由とその背景について関連させて考察し、説明している。

【社会事象の地理的な見方・考え方】

社会的な事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること。

イ 資質・能力を育成する学習評価

資質・能力を育成する学習評価

■生徒へのフィードバック
学習意欲を高める、学びを深める
教師からの働きかけ（価値付け）

■自己評価・相互評価
良い点や可能性、進歩の状況など
→「学びに向かう力」

■生徒へのフィードバック

個々の学習状況を適切に見取り、生徒の学習意欲を高めたり、学びを深めたりするために、生徒の思考や学習活動を価値付けるなど、学習評価を指導の手立てとしてつなげることを積極的に行っていくことが大切です。その際、授業中における言葉かけによる学習評価はもちろんのこと、効率的・効果的な記述等による学習評価についても工夫していく必要があります。

■自己評価・相互評価

生徒自身が、学習活動を意味付けたり、獲得された知識・技能や育成された資質・能力を自覚したり、共有したりし、学びに向かう力を高めることを目指します。生徒が自分の資質・能力の伸びを把握できるように、学習の過程における日々の記録やポートフォリオ、ルーブリックなどを活用していきます。

例) 英語科：本単元で目指す姿について、ルーブリックを用いて生徒と共有し、生徒自身が自分の学びの成果を捉えられるようにした。その結果、目指す姿に向けて生徒が主体的に努力する姿が見られた。

3 来年度に向けて

完成年度である来年度は、今回構築した理論および単元・題材の指導案等に則った実践に入ります。来年度は、研究協力校および研究協力員、研究担当者による単元・題材レベルでの実践を予定しており、その中で得られた知見の整理とデータの分析・検証を行い、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を通しての資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業の在り方について、報告書並びにガイドブック等を通して広く普及していく予定です。

研究報告書は、下記の岩手県立総合教育センターのWebページに掲載しております。

<http://www1.iwate-ed.jp/kankou/kkenkyu/172cd/h28ken.html>